

日本中國學會報 第70集 抜刷
2018年10月6日 発行

学界展望 (文学)

緑川	英樹
道坂	昭廣
永田	知之謙
小松	昌司
平田	

●文 学

はじめに

前集に引き続き、京都大学文学研究科中国語学中国文学研究室（代表：緑川英樹）が学界展望（文学）を担当する。本稿では、2017年1～12月に日本国内で刊行された中国文学関連の論著を対象とし、主要な研究の成果や動向について紹介したい。基本的には単行本を取り上げるが、必要に応じて雑誌論文、国外や過去の業績などにも言及する。

すでに周知のこととは思いますが、昨年（2016年）分を最後に、文献目録の作成および学会ホームページ上での掲載が廃止された。担当校の立場からすると、たしかに作業負担が大幅に軽減されたことはありがたい。しかしながら、当該年に出版された単行本・論文の全タイトルを一覧のもとに見わたすことのできる従来型の目録は、本学会が社会に提供しうる貴重な学術資源の一つだったのではないか。キーワードを入力して、必要な情報に最速でアクセスできれば事足り、というのではなく、何とはなしに目録を眺めているうちに、思いもよらぬ論著とめぐり逢う喜びもあったのではないか。「目利き」(?)による分類・選別を経て編集された目録は、デジタル時代にあつて、もはや役割を終えたのかもしれないが、個人的には一抹の寂しさを覚えずにられない（実は、今年も「内部参考」用に単行本の文献目録を作成した）。

以下、昨年の分類をそのまま踏襲し、時代・領域ごとに論評してゆく。執筆陣には、京大内のスタッフ——道坂昭廣（人間・環境学研究科）、永田知之（人文科学研究科）、平田昌司（文学研究科）各氏に加え、新たに京都府立大学文学部の小松謙氏より心強い助力を得た。緑川を含めた5名の分担箇所については、各項目末尾に氏名を明記する。なお紙幅の都合上、「先秦」と「比較文学」を割愛せざるをえなかったこと、あらかじめ諒とされたい。

（緑川英樹）

一、総記

従来の文献目録の分類では、2つの項目に跨る論著はそれぞれに重複して採録し、さらに広範な領域にわたる場合、「総記」に入れていた。多種多様な内容を含む論文集、あるいは総合的、概括的なテーマの一般書などが多くこれに該当する。武田雅哉『中国飛翔文学誌』（人文書院）は、敢えて分ければ「総記」とするほかないが、「先秦」だけの「近現代」だのといった既成の分類どころか、「中国文学」という枠組みさえも軽やかに越えて天翔る、稀有な存在である。

その長い副題「空を飛びたかった^{キタイ}綺態な人たちにまつわる十五の夜嘯」が示すとおり、第一夜から第十五夜に至るまで、あたかも月がしだいに満ちるがごとく、仙人、パラシュート、凧、飛車、いかだ、気球……など、キタイ＝中国におけるさまざまな飛翔譚が語られる。古典詩研究者としては、ことに第九夜「空にあいた穴のむこう」を興味深く読んだ。月を天空にあいた円形の穴と捉える伝統的な観念に対し、17世紀に望遠鏡が中国にもたらされ、科学知識が更新されると、月球人の視点に立って地球を眺めるといふ詩がうたわれるようになる。著者によれば、そうした趣向（「目玉による飛翔行為」）

は、古く中唐の李賀「天を夢む」詩を先蹤とし、清代の学者阮元「望遠鏡中に月を望む歌」、陳澧「月中の人に擬して地毯を望む歌」などの作品を経て、さらなる展開を見せるという。知的認識と想像力の関係について、きわめて示唆に富む指摘であろう。

古今東西の文献を博捜し、豊富な図像を引用するスタイルは、斯界において武田氏の独擅場と称しても過言ではないが、何よりもまず「おもしろいモノを見つけだし、それを『超マジメに』おもしろがる」（「あとがき」）という、研究対象に対する姿勢が本書全体を貫いている。このような文字どおりの「奇を好む心」こそが武田ワールドとも言うべき独特の魅力の源泉にほかならない。また、同氏を編者の一人とする『中国文化55のキーワード』（ミネルヴァ書房、2016年）も中国文化の底知れぬ深淵へと楽しく誘ってくれる好著である。あわせて挙げておきたい。

より正統派のものとしては、中国文化事典編集委員会編『中国文化事典』（丸善出版）がある。総勢138名による分担執筆であり、中国文学に関わるのは、主に「5. 文学」「6. 美術」「7. 芸能」の部分。限られた紙幅のなかで、記述に工夫が凝らされて読みやすく、巻末の「参考図書」も充実している。漢詩文をはじめ、伝統中国に対する関心が後退しているかに見える日本の若い世代にとって、この種の工具書は有益な導き手となるであろう。とは言うものの、21世紀もまもなく20年目を迎えようとする今、中国文学研究の最前線まで射程に入れつつ、学知のアップデートを目指すような刺激的な概説書が現れないものだろうか。みずからの非力はさておくとして、そんな望みを抱かないでもない。

目を英語圏に転じてみると、Wiebke Denecke（ヴィーブケ・デーネーケ／魏樸和）、Wai-ye Li（李恵儀）、Xiaofei Tian（田曉菲）三氏の編による *The Oxford Handbook of Classical Chinese Literature (1000 BCE-900 CE)* (Oxford University Press) は、まさしくその渴を癒すに足る、2017年の特筆すべき収穫である。本書はオックスフォード版ハンドブックの一冊（執筆者の大半は北米の著名な専門家）。西周から唐代まで約2000年の中国古典文学を対象とし、全体を「序論」「リテラシーの基盤」「文学生産」「時間・場所・人物」「古代・中古の中国と世界」の5部に分かつ。「文学」概念の検討からはじまり、写本文化などテキスト伝播の諸相、文学と書画の関係、注釈・類書・総集による教養の形成、目録学やジャンルの区分、さらには日本・朝鮮・ベトナムの東アジア漢文学など、主に社会史・文化史的な視角から重要な主題を取り上げる。

近十数年ほど、欧米の学界では中国文学史や関連する大型工具書の出版が活況を呈するようであるが、たとえば David R. Knechtges（デイヴィッド・R・コネクタス／康達維）、Taiping Chang（張泰平）共編の *Ancient and Early Medieval Chinese Literature: A Reference Guide, Part 1-4* (Brill, 2010-14) が小項目式レファランズ事典の体裁をとるのに対し、本書の特色はむしろ「中国古典文学研究」という思考の枠組みそのものを問い直す点にある。今後、宋代以降の続刊があるかは未詳。現代文学については、Carlos Rojas and Andrea Bachner, eds. *The Oxford Handbook of Modern Chinese Literatures* (Oxford University Press, 2016) がすでに上梓されている。（緑川英樹）

二、漢・魏・晋・南北朝

この時代の成果として、以下の4点を紹介したい。

中島長文校、伊藤令子補正『魯迅『古小説鈎沈』校本』（京都大学文学研究科中国語学文学研究室）が、京都大学学術情報レポジトリ（KURENAI 紅）によりWeb公開された。本校注は冊子での公表を選択しなかった（20部のみ印刷されたとのことである）。中島氏のこの作業の一部は1990年代に『神戸外大論叢』に発表されていた。氏は序文で、魯迅が『鈎沈』を編纂したのは1912年2月より前であろうという。魯迅の編纂から100年あまりを経て、ようやく「できるだけ正確なテキスト」（中島「序」）が公開されたことになる（もちろん、この間同様の作業が全く行われていなかったわけではない。例えば2000年代に富永一登氏によって『幽明録』の校釈が行われている）。『校本』は、今後古小説を研究する際に必ず参照されるべきテキストとなるであろう。また、この書の如く、研究の基盤となるような有用性を持ちながら公開されぬままとなっている作業が、他にも多くあるのではないだろうか。これが一つの契機となり、さまざまな方法で公開されることを望みたい。

正確なテキストの作成を目的とされた中島氏の作業に対して、高橋稔『古代中国の語り物と説話集』（東方書店）は、テキスト以前の物語の源を探ろうとする。語りのリズム、語りの口調の痕跡を、散文や韻文作品の中に求める第一章「古代中国の語り物三種」、それが後世の文体にも生かされて行くことを述べる第三章「隋唐代における語り物と小説との関係」は、文学作品を読むうえで示唆に富む。

福井佳夫『六朝文評価の研究』（汲古書院）も、作品の表現に注目する。六朝の散文は、周知のようにリズムと技巧が求められた。本書は、曹丕「典論論文」から隋の李諤「上隋高帝革文華書」、日本の「古事記序」「懷風藻序」を取り上げ内容と技巧を論じる。「結語 六朝文の評価」で、福井氏は自身の評価方法を述べ、これら12篇の散文を順位付ける。評価や調査の方法については、今後更なる改良があるかもしれないが、名文とは何かという問題について、基準を示しそれを数値化するというのは、六朝の散文を研究してきた福井氏ならではの提案である。

一方、門脇廣文『洞窟の中の田園—そして二つの「桃花源記」』（研文出版）は、作品の解釈を追求する。各章は、問題点の明示、先行研究の検討、そして論の展開というスタイルで貫かれており、それらが一書に纏められることにより『桃花源記』についての読解を深化させる。

4点は完成された著述と論考であるが、それゆえにまた、それぞれ今後の文学研究の深化を促す著作でもある。（道坂昭廣）

三、隋・唐・五代

最初に、岡村繁『白氏文集』1（明治書院、新釈漢文大系）を挙げておく。長期間にわたって公刊されてきたこの訳注書も、これで本文の出版を終え、第13巻「索引」を残すのみとなった。第1巻には若き日の白居易が著した重要な作品を含む『白氏文集』

巻一から巻四「諷諭」の訳注以外に、著者による長文の「『白氏文集』 解題」が巻頭に収められる。亡き著者とその弟子筋の研究者たちが白居易の全作品に施した日本語の訳注が、今後における斯界の研究に寄与することを期待したい。なお白居易については、白居易研究会編『白居易研究年報』18（勉誠出版）が「特集 飲酒と喫茶」と題して、彼の文学と酒・茶との関係を扱った論考を複数収める。生活文化や白居易の詩文と日本文学との関わりを考える上でも、興味深い企画といえる。

同じく訳注書として、川合康三・緑川英樹・好川聡編『韓愈詩訳注』第2冊（研文出版）が刊行された。本冊では、永貞元年（805）・元和元年（806）に作られたとされる詩歌44篇47首に訳注が施される。期間こそ短い、韓愈が最初の流謫から復帰する時期に当たり、その間には6首の聯句を含む注目すべき作品が書かれている。なお、巻末には齋藤茂「韓愈小伝」「韓愈年譜」が収められる。第1冊の年譜は永貞元年で終わっていたが、本冊のそれは韓愈の死没までを対象としており、小伝と併せて彼の生涯を概観するのに有益である。

この他、個別の文学者を主題とした書籍2点が刊行された。そのうち、黒田真美子『韋応物詩論—「悼亡詩」を中心として—』については、和田英信氏による書評が『日本文学誌要』97（2018年）に掲載されている。当該の書評でも指摘されるが、同書は「もっぱら韋応物詩を対象とする著作としては、おそらくは日中を通じて最初のものであろう」。2007年に発見された韋応物と妻子の墓誌という新資料をも利用しながら、序章、終章、附章を除く主要部5章は、みな比較的近年に発表された論文から構成される。サブタイトルにも示されるとおり、本書の主題は韋応物が亡妻を想って作った詩であり、これらの「内奥に闇を抱え」た作品が韋応物の詩を育み、自然詩において「景情融合」を実現させたと説く。

これに対して、後藤秋正『「春望」の系譜—続々・杜甫詩話—』（研文出版）はI「「春望」について」、II「杜甫の詩と詩語」、III「杜甫の「逸詩」と「逸句」」の3部から成り、杜甫という一人の詩人を扱うにしても、テーマは多岐にわたる。主題が限定されていない点で、先に挙げた『韋応物詩論』が学位論文にも基づくためもあって首尾一貫した論述を進めるのとは、対照的なスタイルを持つ。だが詩中の用語・表現にこだわり、深く分析することを通して対象の詩人像を浮かび上がらせようという点で、両書には共通の姿勢も見受けられる。

著者の『文選』に関する20世紀末からの論文・書評をまとめた富永一登『『文選』李善注の活用—文学言語の創作と継承—』（研文出版）は、第一部「文学言語の創作と継承」、第二部『『文選』 版本考』に、序章「言語表現へのこだわり」を冠する。この「こだわり」は『文選』所収作品に用いられる語彙に李善が抱いたそれを指すが、本書、とりわけ第一部における著者の研究態度とも相通じる。精細な考証と共に、言葉への沈潜が文学研究の王道に位置すべきであることを、先に挙げた詩人論両書と同じく本書は我々に教えてくれる。

文学の領域からやや離れるが、同じ初唐の注釈を扱うということで、洲脇武志『漢書注釈書研究』（游学社）に触れておきたい。著者の学位論文を母体とする本書は現存す

る顔師古注はもとより、散佚した注釈書も俎上に載せて、唐初における『漢書』の改変、注釈が受容される過程などを分析する。文献学的手法を駆使して、『漢書』という権威ある古典に関わって、なお見過ごされていた一側面を明らかにした着実な業績といえる。また本書の著者を含む研究者らによる、顔師古の『漢書』注と同時期に著された史書の部分訳が世に出た。中林史朗・山口謠司監修、池田雅典・大兼健寛・洲脇武志・田中良明訳『中国史書入門 現代語訳 隋書』（勉誠出版）が、それである。大東文化大学の教員や卒業生が編んだ本書は、訳文と原文を対照できるように配置した翻訳（本紀は全訳）と『隋書』及び隋代についてのコラム、資料篇より成る。訳者が多く思想・学術史の専門家であることは、本書の特徴といえよう。

尚永亮著、愛甲弘志・中木愛・谷口高志訳『貶謫文化と貶謫文学 中唐元和期の五大詩人の貶謫とその創作を中心に』（勉誠出版）は、上掲の諸書と少し異なる方法論を用いた著作の翻訳である。『貶謫文化と貶謫文学—以中唐元和五大詩人之貶及其創作為中心』（蘭州大学出版社、2004年）を底本とするが、副題の「五大詩人」とは韓愈・柳宗元・劉禹錫・白居易・元稹を指す。著者は彼ら中唐を代表する詩人が僻地に流された経験を共有することに着目して、その体験が彼らの文学とどう関わるかを論じる。原書で引証される欧米の文献について訳者注などで日本語の訳書が挙げられる他、巻末には「引用詩文索引」も付される。本書によって、「貶謫文学」という概念の有効性に関して、議論が深まることを望みたい。

詩文や注釈学の外に範囲を広げて、長谷部剛・山寺三知共編訳『林謙三『隋唐燕楽調研究』とその周辺』（関西大学出版部）にも触れておくべきだろう。本書は中国語訳のみが伝わる林謙三著、郭沫若訳『隋唐燕楽調研究』（商務印書館、1955年重印）を日本語に反訳し、同書の解説としての陳応時「『隋唐燕楽調研究』の新見解を論ず」、編訳者らが発見した林の未発表原稿「唐楽調の淵源」の他、林の文章2篇、郭の文章1篇を収める。原著は唐代の俗楽「燕楽」を扱う先駆的な研究だが、これまではむしろ中国で声価が高く、日本ではかえって十分に用いられてこなかった憾みがある。本書の行き届いた訳文と訳注がこの後、当該領域の研究に著者の独創的な業績が活かされる契機になるとすれば、実に喜ばしい。（永田知之）

四、宋

『太平広記』が中国小説史研究における基本資料であることは言を待たないが、五百巻の書物それ自体の性格や編纂目的、後世の受容と流伝については、従来必ずしも明らかでなかった。西尾和子『太平広記研究』（汲古書院）は、こうした問題に我が国で初めて正面からとりくんだ意欲作である。首尾に序章と終章を配するほか、全5章の構成。西尾氏の細緻な考証が最も成功したのは、第四章「南宋両浙地域における『太平広記』の普及」であろうか。南宋の両浙地域において『太平広記』の刊刻事業が行われ、その出版費用の支出には当時の転運司が関与していたこと、紹興二十九年（1159）に開催された曝書会の場で『広記』が分賜されたのを契機として受容が拡大してゆくことなど、重要な知見が少なくない。

第二章「『太平広記』成立後の出版経緯」、第三章「変容する『太平広記』の受容形態—「類書」から「読み物」へ—」では、張国風『《太平広記》版本考述』（中華書局、2004年）などの通説に対して異論を唱え、『太平広記』の版木が宮中書庫に死蔵されていた空白期間を仁宗の天聖年間（1023～32）以降とし、刊行され世に広まるのはさらに遅れて蘇軾や黄庭堅が活動した元豊・元祐年間（1078～94）頃であると結論づける。『広記』が詩文作成のための「類書」から小説を愉しむ「読み物」へと変容してゆくのも、世間に流通する過程と軌を一にするという。館閣における書籍（特に鈔本）の閲覧状況はどうか、『広記』の編纂目的や受容拡大を西崑体や江西詩派の盛行とそのまま結びつけることは妥当なのか、といった疑問はこのころが、いずれにせよ、本書が投げた一石をきっかけとして、小説史研究のみならず、宋代文人のネットワークや出版文化の状況など、さまざまな問題意識を喚起することが可能になるであろう。

種村和史『詩経解釈学の継承と変容—北宋詩経学を中心に据えて—』（研文出版）は、本文1000頁＋一覧表・索引33頁におよぶ大著。「歴代詩経学の鳥瞰」「北宋詩経学の創始と展開」「解釈のレトリック」「儒教倫理と解釈」「宋代詩経学の清朝詩経学に対する影響」の5部、全20章から成る。論述範囲は広く漢唐詩経学、宋代詩経学から清朝考証学の詩経学までを含むが、本書の特徴は、各時代の学者・論著それぞれの有機的連関や影響関係を重視し、独自の『詩経』解釈学史を構築した点にある。

北宋詩経学に関する分析はとりわけ周到である。その結論の一端を示せば、たとえば欧陽脩『詩本義』をはじめとする北宋詩経学の形成には、実は唐代の『毛詩正義』こそが直接的かつ根本的な影響を与えたこと。また、王安石と程頤は政治的に対立関係にあったが、『詩経』解釈においては両者共通の学的志向性が認められること。いずれも旧来の説に補正を迫る見解であろう。「日本宋学研究六人集第二輯」の一冊として、中文版『宋代《詩経》学的継承与演变』（李棟訳、上海古籍出版社）も同時刊行されており、今後、詩経学者だけにとどまらず、広く国内外の古典学者からの反響を期待したい。

最後に訳注書にも触れておこう。『風絮別冊 龍榆生編選『唐宋名家詞選』北宋編（一）』（日本詞曲学会）、齋藤茂・田淵欣也・福田知可志・安田真穂・山口博子『『夷堅志』訳注 乙志上』（汲古書院）、福本雅一監修『中国文人伝』第6巻宋4（藝文書院）は、それぞれ順調に刊行を続けている。特に『中国文人伝』は専門家以外にあまり存在を知られていないように思うが、詩人・文学者の伝記だけでなく、書画骨董に関連する人物の伝記についても詳細な訳注を施すシリーズである。既刊の第3～5巻には、梅原郁「北宋前半の官制」「北宋後半以後の官制」「宋代地理のあらまし」が附載されており、文学研究者にとって大いに参考になる。（緑川英樹）

五、金・元・明・清

金・元・明・清文学については、文学作品を専門的に扱った大きな研究書は刊行されなかった。しかし、この時期に関わる学際的研究においては注目すべき業績が認められる。

まず高橋文治編『『元典章』が語ること—元代法令集の諸相—』（大阪大学出版会）。

元代のさまざまな法令を集めた『元典章』について、成立の背景・内容・文体・文書行政のありかたなど多様な方面から研究を進めたこの書は、通常なら歴史学に分類されるものであろう。しかし、『元典章』に多く見られる蒙文直訳体という特異な文体の位置づけは中国語学の重要な問題であり、その他の白話文も、中国語学はもとより、元曲をはじめとする白話文学を研究する上でも重要な参考資料となる。更に、そこに描かれている元代社会の諸相や官僚システムの実態は、他では知りたい庶民生活の様相を豊富に伝えるという点で、元代文学を理解する上で極めて重要な知識を提供してくれる。さまざまな分野の専門家の協同作業により生み出された本書は、学際的研究の重要性と効果を如実に示す好例といってよい。そこからは、『元典章』という書物、そしてその背後にある元代社会の実態が鮮やかに浮かび上がってくる。

次に美術と関わる業績を取り上げよう。瀧本弘之編『中国古典文学挿画集成第十集 小説集（四）』（遊子館）は、長年継続して刊行されているシリーズの一冊であり、充実した解説が付されているのも毎度のことではあるが、今回特に取り上げたのは、上原究一氏と松浦智子氏による解説が、小説研究における新たな方向性を示す高い水準にあるためである。両氏は挿絵についてその原拠を追究し、版本と刊行者に関わる精密な調査を行うことにより、これらの刊行物の性格を明らかにしている。ここに示されているのもやはり学際的研究の重要性である。明代後期以降の文学作品、特に不特定多数の読者を想定して制作される白話小説のような近代的性格を持つ対象を研究する際には、書誌学・歴史学・美術史の知識、更には当時の社会状況に対する社会学的な把握が求められる。若い世代から、幅広い知識と視点を持った研究者が生まれつつあることは、白話文学研究における新たな展開を予想させるものである。

同じく美術との関わりを持つクレイグ・クルナス著、武田雅哉訳『図像だらけの中国 明代のヴィジュアル・カルチャー』（国書刊行会）は、1996年の著作の翻訳である。新たな業績とはいいいがたい書にあえてふれるのは、文人画を上位に置く従来常識とされてきた観点に対し、一般の人々の間では写実的な絵画が重視されていたことを論証する同書が、知識人とは異なる観点から見直そうとするその後の文学研究における一つの流れを先取りしたすぐれた研究であることを紹介するとともに、20年前の著作が今初めて翻訳出版されたこと、本書の注釈に引かれる先行研究には、中国の論文を経由したもの以外にはほとんど日本における業績が含まれていないことに問題を感じたためである。欧米の中国学研究が日本に紹介されることは少なく、逆に欧米の研究者も日本の研究を目にする機会を持つことは少ない。これは改善を要する喫緊の課題である。

西欧からの目という点では、文学研究とはいいいがたいが、新居洋子『イエズス会士と普遍の帝国 在華宣教師による文明の翻訳』（名古屋大学出版会）が興味深い視座を提示している。清代に活躍したイエズス会士アミオの活動を中心に、どのような中国像が、いかにして西欧に伝わったかを精密に論じた同書は、シノロジーの基礎となった西欧における中国像の形成過程を明らかにするとともに、中国文明を相対的視点からとらえ直す機会を与えてくれる。満洲語を「普遍語」として認識しようとする動き、イエズス会士に中国史の知識を提供したのが建陽の書坊が刊行した通俗的な歴史書であったことな

ど、中国の言語・文学に関わる興味深い事実も多い。

もう一つ、小川陽一『明清のおみくじと社会 関帝靈籤の全訳』（研文出版）も学際的研究の一例といってよい。以前から日用類書と小説の関係についてすぐれた論考を発表してきた小川氏の手になる同書は、今日も広く用いられている関帝廟のおみくじ『関帝靈籤』について解説を施し、全文を翻訳したものである。中国の人々に深い影響を及ぼしているにもかかわらず、文献の表面に出ることがほとんどないこうした資料の紹介は、本書でも述べられているように、その影響を受けている白話文学研究はもとより、中国社会について理解する上でも資するところが大きい。

大木康『蘇州花街散歩—山塘街の物語』（汲古書院）は、明末清初に盛名を馳せながら、その実態が必ずしも明らかではない蘇州の花街の実態を、实地踏査と文献読解を組み合わせるにより再現しようとするものである。土地とそこにまつわる記憶を掘り起こすことにより、かつて存在した文化を描き出そうとする試みは、やはり文学・地理・歴史に架橋する研究成果といってよい。蘇州への愛にあふれた筆致も印象的である。

更に、井波律子訳『水滸伝』（講談社学術文庫）と、二階堂善弘監訳『全訳封神演義』（勉誠出版）という大規模な翻訳の刊行を忘れてはならない。前者は、岩波文庫の吉川幸次郎・清水茂訳以来の容与堂本『水滸伝』の新訳であり、後者は、一般に広く人気を博しながら、これまでは正確さを欠く翻訳や抄訳ばかりで、登場人物名などについても不正確な情報が拡散している状況にあった中で、待ち望まれていた学術的価値を有する正確な翻訳である。両書ともに、訳文は読みやすく、その点では申し分ない。ただ、日本における白話小説翻訳における問題点も表面化してきたように思われる。

これは日本におけるほとんどの白話小説翻訳、湖南文山の『通俗三国志』や岡嶋冠山訳といわれる『通俗忠義水滸伝』にまでさかのぼる問題である。本来文学作品の翻訳とは、原文をできる限り忠実に自国の言語に移すことを目標とすべきものであり、原文の文体を可能な限り再現することこそ最も重視されねばならない最優先の課題であるはずである。白話小説の地の文は、すべて饒舌な語りのスタイルで書かれている。従って、文学作品として中国の白話小説を日本語に移すのであれば、やはり語りのスタイルを取るべきである。しかし、江戸時代以来、そのような文体で白話小説を翻訳した例はほとんどない。結局日本人にとって、白話小説とは内容を楽しむものであって、文学作品として味わうものではなかったのではないか。数少ない例外の一つは、吉川・清水による『水滸伝』であった。この翻訳が成功しているかどうかはともかくとして、それが極めて果敢な試みであったことは間違いない。中野美代子訳『西遊記』（岩波文庫、2005年）もこの方向を試みているが、その後語りのスタイルで白話小説を翻訳した事例は目につかない。もとより、今回の二つの訳書はともに商業ベースで刊行されたものであり、読者のなじみやすさを考えれば、語り口調で訳すことは困難だったであろう。しかし、そろそろ白話小説を西欧の小説と同等の文学作品として認識し、原文の香気を伝えることを試みるべき時期に来ているのではなかろうか。

（小松謙）

六、近現代

近現代中国（語）文学についての出版物で最も多いのは同時代小説の翻訳である。訳出すべき作品の発見、訳注や解説の作成に至る過程は、往々にして論文執筆よりも手間がかかるものだが、本欄での紹介対象は研究書に限ることとした。

最も注目すべき収穫は、1997年に刊行された *Fin-de-siècle Splendor: Repressed Modernities of Late Qing Fiction, 1849-1911* が、王徳威著、神谷まり子・上原かおり訳『抑圧されたモダニティ：清末小説新論』（東方書店）として刊行されたことかも知れない。これにより、多数の語彙を縦横に駆使する王徳威の著作が、日本の読者にとっても近づきやすいものとなった。原著刊行に20年遅れて翻訳出版されたことは、日本における近代中国文学研究に、国際学界の動きに追いつけていない部分があることをも意味する。書評は週刊読書人ウェブ（鈴木将久）、『東方』442（石井剛）。

本年刊行の成果と関連して、少し以前に刊行されたものながら、橋本陽介『物語における時間と話法の比較詩学 日本語と中国語からのナラトロジー』（水声社、2014年、以下『比較詩学』と略称）に触れておきたい。いわゆる物語論は、時制と人称を持つフランス語など欧米の言語を前提として形成され、それをいかに日本の中国文学研究に応用していくかが、中里見敬『中国小説の物語論的研究』（汲古書院、1996年）以来、課題とされてきた。本書は、物語における「語りの位置」と「時間」と「視点」を主題として、日本語のル形／タ形の交替や中国語のアスペクト形式“了”および話法を、フランス語・英語と対照しつつ、日本語・中国語のための物語論（および日中翻訳論）をうち立てようと構想されており、500頁を超える分量である。そこには、(1)魯迅から韓寒（が文章で遊んでいる）『長安乱』までの多様な文体の作品を一括して「中国語物語」として扱っているのは妥当か、(2)橋本氏の観点にもとづいて一篇の小説の「時間」と「視点」の全体を解釈しきれぬか、(3)中国語アスペクトを橋本氏自身がいかなる体系と考えているのかが雑多な先行研究の引用に覆われて不明、といった無視できない問題点があるものの、本書の抱く志には注意しておくべきだろう。大著だけに、重複あるいは不可欠ではない記述をもう少し整理する工夫があってもよい。また「、」を句点、「。」を読点と呼ぶ（302、303、484頁）ような混乱があり、当該箇所の議論の展開を追いにくくしている。

この『比較詩学』を基礎としたのが、橋本陽介『越境する小説文体—意識の流れ、魔術的リアリズム、ブラックユーモア』（水声社）で、「20世紀の小説文体を取り上げ、言語表現それ自体が国境を越えてつながることを示す」ことをめざした。冒頭の1章でジョイス『ユリシーズ』の日本文学への影響を論じるのに続き、残り4章で徐志摩・林徽因・劉呐鷗・施蛰存・穆時英・王蒙・高行健・莫言・鄭義・劉索拉・余華・劉震雲・閻連科らの小説が海外文学から受けた文体・文学様式上の影響を扱う。『比較詩学』が「歴史的な経緯は本書の関心の対象ではない」として、池谷信三郎作品の劉呐鷗による中国語訳、穆時英の小説における「日本語小説の文体的影響」につき略述するにとどめたのを補完する著作だと言ってもよい。ただし、海外作品の原典を読めた作家が目立つ

1920～40年代の中国と異なり、1978年以降には原著の中国語訳のみを通して海外文学から影響を受けた作家が多い。そのためか、魔術的リアリズムとブラックユーモアを扱った章では、論証にあたって原典を例示することが少なく、小説文体の研究としては物足りない。次なる工程として、これまでの研究を踏まえ、アスペクト体系に関するみかたも明確化し、個別の作家の特定の小説にあらわれた「時間」と「視点」を、一貫した立場で最初から最後まで分析しとおすなら、新たな貢献になるのではないか。

武田雅哉『中国のマンガ〈連環画〉の世界』（平凡社）は、いわゆる近現代文学の範疇から外れるが、物語の普及に一時期重要な役割を果たした連環画を対象とした通史である。壁画、全相本、『点石齋画報』といった古い絵解きの伝統にまでさかのぼり、著者自身の収集した膨大な一次資料に拠った豊富な図版とあいまって、流れが把握しやすい。特に文革期文学に頻出する善玉・悪玉表象を知るには絶好の資料である。巻末の「日本の読者のための一章」は今後の研究の手引きとなる。補足を期待したいのは、「淪陷区」における状況である。たとえば日本陸軍の占領地宣撫工作で利用されたという国策紙芝居（日本における一種の連環画と言えよう）が本書の記述する歴史の中に組み込めるのか否か、紙芝居という様式が占領下の中国で土着化しなかったのはなぜかといった点が知りたい。

中国近現代文学を、晩清・五四前夜から同時代までの連続体として把握する先見性は、1962～63年の小野忍・竹内好・中野重治・増田渉・松枝茂夫編『中国現代文学選集』全20巻（平凡社）でつとに示されたものである。松田郁子『呉趼人小論—「譴責」を超えて』（汲古書院）は、晩清の代表的作家のひとり呉趼人に関して日本語で書かれた初めての研究書で、「譴責小説」の作者とだけ記憶されがちな呉趼人について、女性性・理想社会・複数のスタイルの意識的選択といった面からの再評価をめざす。ただ、20年以上かけて書いた論文の集成であるため、やや散漫な印象を与えてしまう。1980年代末期から晩清・五四文学の連続性の再定位に最大の貢献があった陳平原や王德威の著作を参照しつつ、分析を掘り下げ、全体に統一感を与えるだけでも、本書の印象はかなり異なっただけである。誤記、引用文の誤訳、文章の推敲不足は、気になる。8頁6行「大半の作品は」の直前には文章の脱落があると思えない。

藤田梨那『詩人郭沫若と日本』（武蔵野書院）は、郭沫若の日本留学期（1914～23年）と日本亡命期間（1928～37年）における文筆活動を中心に扱ったもので、こちらも20年以上書き続けた論文の集成にもとづく。第4章は詩集『女神』（1921年）の作品論で100頁を超え、本書の核心をなす部分である。今後の研究にあたっては、岩佐昌暲「日本における郭沫若『女神』の研究」（『海外事情研究』39-2、2012年）が過去の研究の不足を論じて、「日本における西欧文学の受容」「大正期の思想・文化との関連」の重視の必要性を強調したことが活かされるべきだろう。とりわけ旧制高等学校の外国語教育課程や日本近代詩史からの検討は不可欠である。

松岡正子・黄英哲・梁海・張学昕編『歴史と記憶 文学と記録の起点を考える』（あるむ）は、2016年6月に大連で開催された研究集会の成果で、日本語・中国語による論文を収め、近現代文学と映画が10篇（うち翟永明論文・季進論文はCNKIでも読め

る)、歴史が6篇という構成である。

最後に一言書き添えておきたい。人文学の研究力をはかるのに学術書の重要性が圧倒的に高いことは、学界での共通認識なのであろう。それならば、著者は学術書の質に責任を持たなくてはならない。さらに望むらくは、査読者や出版社の編集者におかれても、原稿の質を、厳しい目で見ていただきたい。(平田昌司)

七、日本漢文学

河野貴美子ほか編『日本「文」学史—継承と断絶』第2冊(勉誠出版)所収の論考は、すべてが日本漢文について述べたものではない。しかし早期の渡来人から江戸期までの日本において、作者の側、読者の側、両者を繋ぐ媒体、そしてそれらを支えた社会のありさまといくつかの論点を設け、漢詩文をはじめとする中国の学術の受容と変容を広い視点から論じている。

平安時代の漢詩文に対する論考では、後藤昭雄『平安朝漢詩文の文体と語彙』(勉誠出版)が出版された。後藤氏は平安朝漢詩文について多くの研究があるが、本書は、ジャンル(氏は「文体」とされる)、特に碑文や祭文といった従来あまり注目が及んでいなかった分野について、中国の作品との関係などを詳細に論じる。特にI-4「入唐僧の将来したもの」、7「外交文書としての牒」、9「平安朝の願文」は、この時期の散文のありさまを例示し、さまざまなジャンルに対する日本人の理解と修得について紹介している。

後藤氏の論考に示されるように、平安朝及びそれに先立つ奈良朝の漢詩文研究は、中国文学の影響を無視して考察することはできない。「古代文学と隣接諸学」(竹林舎)と題されたシリーズの2『古代の文化圏とネットワーク』所収IV「文学創造の「場」と集団」の論考や、9『万葉集』と東アジア』所収の論考の幾つかは、濃淡はあるが平安朝までの日本の漢詩文における中国文学の影響に焦点をあてている。しかし題名に示されるように、東アジアを一つの文化圏とし、その視野から漢詩文を含む日本の古典文学を考察しようとする方向も顕著である。ただ文化圏(「漢字漢文文化圏」と称されることが多い)を設定した場合、当然共通性ととも各地域の受容の差異や独自性も追求されることになる。この視点からの発言は、日本文学研究者によって為されるものが多いが、中国文学研究の側においても、「隣接諸学」に対するより広い目配りが益々必要となってきたのではないだろうか。

平安朝の漢詩文が、中国文学の影響を意識して読む必要があるのに対し、江戸期の漢詩文は、明清の文学流派の影響が論じられることがあるものの、日本人の文学的営為の一つとして読むことが可能である。揖斐高訳注『柏木如亭詩集』1・2(平凡社東洋文庫)は、解説で如亭が南宋詩を好んだことが指摘される。しかしその詩からは放浪と享楽に生きた詩人の姿が浮かび上がり、近代の私小説を読むような近しさを感じる。奇しくも1971年中央公論社より刊行された中村真一郎『頼山陽とその時代』がちくま学芸文庫から再版された。本書は漢詩に対する堅苦しさや古めかしさといった先入観を払拭し、江戸漢詩の魅力を広く江湖に紹介した。揖斐氏の訳注はこの系譜に繋がる。

如亭の没後数年して会津に生まれた南摩綱紀の生涯は、彼と大きく異なる。小林修『南摩羽峰と幕末維新期の文人論考』（八木書店）は、漢学者漢詩人としてよりも、会津藩士、また幕末維新の知識人として南摩を論じようとしている。そのため引用される詩は、社会や政治に対する感慨、会津の悲運を嘆く作品が多く、如亭詩の如く、作品のみを取り出して鑑賞できるというものではなく、作品は作者のその時の状況と分かちがたく結びついている。このような二人の詩文の違いは、太平と動乱という時期の違いのみならず、会津藩校から昌平黌に学んだという南摩の履歴にも求められないだろうか。如亭はどうやら詩社など民間詩人のネットワークに頼って遊歴を繰り返したようだが、それとは別に、各藩から派遣された学生たちが、昌平黌を軸として、藩を超えた（超えようとする）ネットワークを形成しつつあったことがこの伝記から読み取れる。江戸時代の漢学及び漢詩文の世界は、相互の交流は有しながらも重層的な構造であったのではないだろうか。山陽や如亭の詩のように近代的とも言える感性を持つ江戸漢詩の紹介と研究とともに、学的雰囲気濃厚にもつこの時期のもう一つの集団に対する研究、そしてその明治への継承の解明もなされなければならない。

萩原正樹『詞譜』及び森川竹篔に関する研究』（中国芸文研究会）は、詞の作者、またその研究者である森川竹篔の生涯やその家系、更には周辺の漢学者等が詳細に紹介される。その点で、南摩が属したような漢学者集団の、明治に入ってからの継承の一端をうかがわせる論考として読むことができる。江戸期の漢学者は中国詩文について、その学術や作品を盲目的に崇拝したのではなく、少なくとも同時代の明清の文学に対しては、同一地平にたって論評しようとしているように思われる。本書「竹篔の『欽定詞譜』批判」は、明治においてもそのような研究態度が維持されていたことを示す、重要な論考である。中国文学を日中共有の古典として研究しようとするこのような姿勢は、文化圏としての枠組みから考察を行おうとする、現代の研究の先駆とみることができのかもしれない。また表現手段としての漢詩文研究とともに、江戸時期の中国文学研究の水準と態度に対する検証が今後必要なのではないかと感じられた。（道坂昭廣）

八、書誌学

まず専門家以外の読者を特に想定しつつ編まれた著作として、京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター編『目録学に親しむ 漢籍を知る手引き』（研文出版）に触れておく。「京大人文研漢籍セミナー6」と銘打って刊行された同書には、東京で開かれたセミナーの講演録に基づく3篇の文章—目録学に関する総論、子部の分類を扱う論考、『四庫全書』を主題とする概説—に加えて「漢籍目録の参考文献」と題する附録が収められている。

公益財団法人東洋文庫監修、岡本隆司編『G・E・モリソンと近代東アジア 東洋学の形成と東洋文庫の蔵書（コレクション）』（勉誠出版）は論文6篇と座談会の記録2篇などから構成される。モリソン旧蔵書は東洋文庫が有する文献の礎石として著名だが、編者らの共同研究は特にモリソンパンフレットを分析の対象とする。その成果として別に学術書が公にされているが、本書はそれらの内容をわかりやすく書き改めた文章を取

録する。貴重な資料の特性を知ると共に、東洋学が発展してきた軌跡を考える上でも興味ある一書といえる。この項の文学という枠組みから距離はあるが、学術史に関わる業績として挙げておきたい。
(永田知之)

●語学

はじめに

今号より語学部門は日本中国語学会が担当することになった。近年の研究状況及び大学の研究体制の変化などにより、単独の大学が学界展望を執筆することは難しく、とりわけ語学部門ではその傾向が顕著であった。そのため、日本中国語学会の会員が個別に依頼を受けて執筆を担当することが常態化していたが、今後は学会として責任ある体制を整え、日本中国語学会からの依頼に対応していくことになった。学界展望の作成という共通の目標を得たことによって、両学会の交流がこれまで以上に深まることを期待したい。

本稿が対象とするのは、2017年1月から12月に原則として日本国内で公刊された著書および研究論文である。ただし、近年は海外で発表される語学研究の成果も少なくないことから、重要なものは適宜取り上げることとした。

分類と担当者は以下の通りである。基本的に従来分類を踏襲しているが、文字と訓詁を一つにまとめ、文法・語彙を上中古、近代、現代の三つに分けた。執筆にあたっては、網羅的な記述とならないよう、担当者が興味深いと感じた研究成果をあえて主観的に取り上げるよう努めた。

- はじめに……………佐々木勲人 (筑波大学)
- 音韻……………千葉 謙悟 (中央大学)
- 文字・訓詁……………野原 将揮 (成蹊大学)
- 文法・語彙
- 上中古……………戸内 俊介 (二松学舎大学)
- 近代……………石崎 博志 (佛教大学)
- 現代……………池田 晋 (筑波大学)
- 方言……………八木 堅二 (国土舘大学)
- 教育……………鈴木 慶夏 (神奈川大学)

一、音韻

2017年の音韻研究についてまず単著から瞥見する。第一に遠藤光暁『漢語音韻論稿』、『東亜言語論稿』（ともに好文出版）。前者は著者の1986年から2016年にかけての漢語音韻史に関する論考を、後者は2001年から2016年にかけての地理言語学を中心とする論考を収録する。漢語音韻の研究を志す者にとって氏の成果は最初に参照すべきものの一つとなっているが、それが前著『漢語方言論稿』（好文出版2001年）とともにまと